

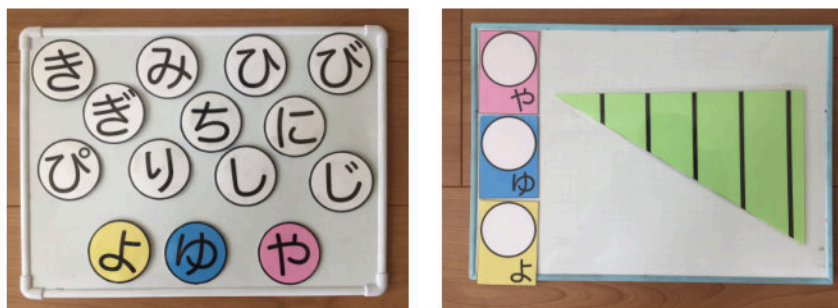
## 【5】ねじる音の学習

ねじる音とは「小さい〈や・ゆ・よ〉」のこと。正式には拗音と言います。拗音は本当に難しいです。通常学級の高学年の子でも、時々つまづいている子を見かけます。まして、1、2年生の中には、読めていない子がたくさんいると思って間違いありません。

そして、拗音がスラスラ読めないと、漢字学習でもつまづくことになってしまいます。だって、漢字の音読みには、たくさん拗音がでてくるでしょ？ひらがなの拗音も読めない子に、「カタカナの拗音を読め、書け、漢字と結びつけて覚えよ」というのは、かなり乱暴な状態なのです。

拗音は二つの音を組み合わせたり、分解したりする、全く新しい感覚です。まずは「ゆっくり考えればわかる状態」を目標に。でも、スラスラ使いこなせる段階まで習熟しないと、大きく苦勞してしてしまいます。そのためには楽しく習熟するのが一番！下に紹介する三角シートを使いながら、後で紹介する「マッチングゲーム」や「ことば絵カード」でたっぷり遊ばせてあげてください。

### 【三角ボードの作り方】



上の写真が完成形。データはCD《拗音・長音ルール指導→拗音指導》に収録。少人数指導版（ダイソーのB4のホワイトボードに収まるサイズ）で作る場合は、拗音のタネをA5サイズ。三角シートをA4サイズで印

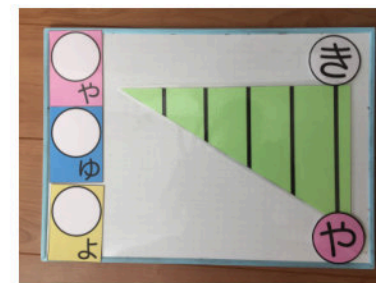
刷してください。通常学級の一斉指導で使う場合は、拗音のたねをA4サイズ。三角シートをB4サイズで印刷してください。

印刷した後、ラミネート加工して、ハサミで切り取ります。裏に磁石をはるのですが、特に拗音のたねは、ピタッとしてしっかり張り付く方が使いやすいです。100円ショップに売っているネオジム磁石（8こ入りくらいの小さいもの）を使うのがおすすめです。



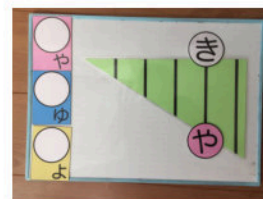
### 【活動1】音の合成・分解

①「今日は、二つの音をねじって、くっつけます。はじめに〈き〉と〈や〉をくっつけてもみよう。」と言って、〈き〉と〈や〉のカードを三角シートが一番右の線に合わせしておく。



②〈き〉のよこで一回、〈や〉の横で一回手を叩きながら、ゆっくり読む。「き や」

③「だんだんくっつけていきまーす」と言って二つのひらがなを少しずつ左へ移動していく。同じように文字の横で手を叩きながら、少しずつくっつけていく。



「き や」



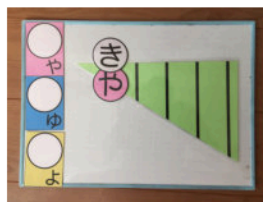
「き や」



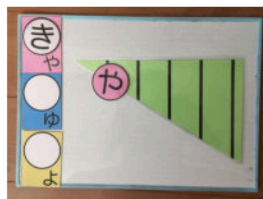
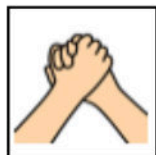
「きや」

④最後の線のところは、大事なので何回か確認。とても早口で「きや！」っと言う。

「きや」になる前、早口の「きや」。これが言えるのはとても大切。中には、上手に「きや」にならないで、ここで終わってしまっている子もいるので、要注意です。



⑤「最後、完全にくっつけるよ～。ねじってくっつけます。」 「きや！」（両手を交差させてたたく）



⑥「〈きや〉の時は●●」「〈きや〉になると●と書きます」と音記号の説明をして、もう一度最初から、音をくっつける。

⑦「〈きや〉からはじまる言葉ってどんなことばがありますか～？」とみんなで出し合う活動はとても大切です。みんなで考える時間をじっくり確保してください。

⑧「同じようにいろいろな音をくっつけてみよう」と呼びかけて、ボードから好きな文字を選んでもらいます。いくつか、みんなでくっつけていくといいでしょう。

⑨音の合成ができるようになったら、次は音の分解を練習します。例えば「〈ぎや〉は何と何からできているでしょう？」と出題。

「コツはゆっくり言うことだよ～」と教えて、合成の逆を何度か練習します。最初は難しいので、教師主導で。

「ぎや」ゆっくり言う～

「ぎや」「ぎ や」「ぎ や」・・・「ぎ」「や」

だから〈ぎ〉と〈や〉だね。ほんとかな？くっつけて確認！

何回か、「はやく言ってくっつける」「ゆっくり言って分解する」を行ったり来たり。繰り返し練習しましょう。

## 【活動2】音みつけ

①CDから「拗音ことば」の問題と答えをプリントアウトする。問題と答えが裏表になるように合わせてラミネートしておくとし便利。

②これはなんでしょう？といって問題カードを見せる。わからない時は「やさいです」「外は緑。中は黄色です」など、ヒントを出していく。



③問題は「かぼちゃ」ということ、ねじれている音は「ちゃ」ということを、声に出しながらみんなで確認する。

④「〈ちゃ〉は何と何を合わせたら作れるかな？」と質問。ボードから選んでもらう。この時、選んだ文字が正解でも、正解でなかったとしても、同じように三角シートのところにはってもらう。

⑤正解かどうかは、毎回一緒に確認する。例えば〈ぎ〉と〈ゆ〉を選んだとする。「〈ぎ〉と〈ゆ〉をくっつけてみよう！」ということで【音の合成】で自分で確かめる。

⑥なるべく教師は「正解」とか「違う」と伝えない。子ども自身が「あっ。違う」「直したい」と気付けるように、ヒントをたくさんだしてあげてください。